

平成 30 年 6 月 27 日現在

機関番号：22702

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26381137

研究課題名(和文)中国西南における少数民族文化の教育課程化に関する比較教育学的研究

研究課題名(英文)Curriculum Development of Minority Culture in Southwest China: A Comparative Education Study

研究代表者

金 龍哲 (Jin, Longzhe)

神奈川県立保健福祉大学・保健福祉学部・教授

研究者番号：20274029

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：中国における少数民族の文化は、かつては村や氏族共同体において形成された独自の伝承装置を通して次世代へと伝わったが、中華人民共和国成立後は「二言語教育」の形で学校教育に組み込まれ、さらに1980年代以降は新しい教育課程モデルの実施に伴って、より多様な民族文化が教育課程として学校教育に定着するようになった。

本研究では、現地調査を通して、少数民族の伝統文化が学校の教育課程として成立するプロセス、その教育課程の実施状況と課題を明らかにし、グローバル化が急速に進む現代において学校教育が少数民族文化の伝承装置として働くべき役割、文化多様性の保全に寄与する教育課程モデルの可能性を検証した。

研究成果の概要(英文)：Minority culture in China was originally transmitted to the next generations by unique approaches formed in the villages or the clan communities. However, bilingual education was implemented widely in schools after the founding of People's Republic of China, and particularly since 1980s, along with the introduction of new curriculum model, more diverse minority cultures as curriculum have become established in schooling.

This study, through field survey, investigated the process, current practice and future tasks of curriculum development of minority culture, analyzed the roles of schooling as transmitting method of minority culture in modern times with a rapidly proceeded globalization, and examined the possibility of development of curriculum model with a purpose of preservation of culture diversity.

研究分野：比較教育学、教育人類学

キーワード：文化多様性 少数民族の教育 文化の伝承装置 教育課程の成立 教育課程モデル 伝統文化

## 1. 研究開始当初の背景

中国における少数民族の教育は、国民国家の枠組みにおける「国民教育」と民族文化の伝承を目指す「民族教育」とが学校教育という時空において両立することを前提として制度設計されたが、その実施過程において多くの限界を露呈してきた。とりわけ、「少数民族の教育」=「二言語教育」の構図が確定されるにつれ、少数民族の教育は、事実上、「民族の言語+共通語」という一種の方法論に矮小化される結果となった。「漢語と民族語の両方に精通した人材の育成(民漢兼通)を目的とする二言語教育は、政策においても、またその実践においても民族言語と普通話(漢語・漢文)の教育課程化とその教授法に重心が置かれ、少数民族の社会と経済、歴史と地理、生活様式と習慣、芸術と宗教、生産活動、体育、儀礼や行事などを含めた多様な民族文化を教育課程として学校教育に導入するメカニズムの形成を妨げてきたのである。

また、文字を持たない民族、あるいは文字を持つとしてもその使用範囲が限られた民族は、二言語教育の恩恵を得にくい問題があった。二言語教育は、教授言語の選択によって、民族言語を教授用言語とした場合の「漢語導入型」と、漢語を教授用言語とした場合の「民族語導入型」に分けられるが、こうした二言語教育は、事実上、文字を持ち、しかもその文字が広く使用されている場合に限られるケースがほとんどであった。文字を持たない民族の場合、言語学習のための教育課程の編成、或いは言語を媒体とした民族文化の教育が困難なのである。教授用語として用いられる民族言語は、往々にして「教える手段」であって「学ぶ内容」ではない。文字を持たない民族にとって、二言語教育とは結局のところ、「教授用語の問題」である。民族言語は、小学校低学年における教授補助言語として用い

られ、漢語による授業が可能になると、いずれ教室から姿を消す運命にある。多民族混合地域の学校においては、授業を行うための教授用語の確立が最も現実的な課題である。西南地域の多民族混合学校では、学前クラスを設け、子どもたちは義務教育段階の学習に備えて、一年間の学前教育を通して教授言語としての漢語を身に付けていくのだが、そこでは民族言語の習得が話題になることはまずない。文字を持たない民族は、最終的には「他民族の言葉で他民族の文化を学ぶ」のである。

こうした中、特に今世紀に入ってから見られつつある「二言語教育」の限界の克服を目指した動きが注目される。より幅広い民族文化を学校教育にカリキュラムとして導入し、多様な教育方法で民族文化の伝承を図ろうとする気運が活発化してきたのである。学界において民族文化の教育課程化を扱った論文が急増し、また、学校現場の実践からも文字をもたない民族や人口規模の小さい民族の文化が「教室に入る」ケースが多くみられるようになった。「少数民族教育即ち二言語教育」という枠から解放され、言語に限定されない多様な文化の伝承を目指すようになった背景として、今世紀に中国全土でうねりを見せる「伝統への回帰」の巨大な流れと「国家統一課程+地方開発課程+学校開発課程」の三段階教育課程モデルの定着がある。「伝統への回帰」では、少数民族の文化は「中華民族の文化を構成する重要な一部分」として位置づけられ、教育課程モデルのチェンジは少数民族文化の教育課程化を制度的に保障するものと理解されるからである。

## 2. 研究の目的

本研究は、中国における少数民族教育のこうした新しい動向を踏まえて、少数民族の伝統文化が学校の教育課程として成立するプロセス、その教育課程の実施状況及び

直面している課題を多角的に検証し、グローバル化が急速に進む現代における「文化多様性」の保全とそれに寄与する学校教育の在り方を明らかにすることを目的とした。具体的には、従来、「国民教育」を担ってきた学校教育に少数民族の文化が教育課程として定着することを可能にした要因とは何か、伝承に値する文化は如何なる理由で選択されるか、それはまた如何なるプロセスで教育課程として成立し、また如何なる方法で実施されるか、少数民族の教育課程化が抱えている課題とは何か、学校教育において文化多様性の保全に寄与しうる教育課程とは如何なるものか、等について明らかにした。

### 3. 研究の方法

本研究には質的研究手法が用いられた。現地調査は、予備調査を通して確定された雲南省、四川省、貴州省の居住するナシ族、モソ人、ジノー族、トゥルン族、チャン族、トン族を主な対象とし、伝統文化の教育課程化に熱心に取り組んでいる少数民族のエリート、学校の教師と生徒、卒業生、保護者、行政部門の関係者、宗教的職能者...等を対象としたインタビュー、学校訪問、授業見学、座談会、現地の祭りや行事への参加などの方法を用いて実施した。

なお、調査は、日本文化人類学会、日本比較教育学会および神奈川県立保健福祉大学の研究倫理規定を順守して行った。調査地域及び日程は以下のとおりである。

第1回(2014年8月14日-9月8日): 雲南省麗江市白沙小学校、寧浪県落水村小学校及び浪放小学校、基諾郷民族小学校等における民族文化の教材化に関する調査、永寧郷教育関係者のインタビュー、第2回(2015年8月14日-9月8日): 張勇元榕江県文化館長へのインタビュー調査(貴州省凱里市)榕江県車民小学校における歌

垣伝承の取り組みに関する調査、雲南省独龍族中心小学校の民族言語教材化に関する調査、麗江市白沙小学校における東巴文字、ナシ文化教育に関する調査、第3回(2016年8月19日-9月10日): 貴州省榕江県車民小学校の歌垣と課外活動に関する調査、雲南省寧浪県落水小学校におけるプミクラスの現状に関する調査、永寧中心幼稚園の設立及び運営に関する調査、モソ人の宗教的職能者(阿洪生ダバ)のインタビュー、麗江市白沙小学校におけるナシ文字の取り扱い方に関する調査、福建省廈門大学における閩南方言保護に関するインタビュー調査、第4回(2017年8月17日-9月16日): 貴州省威寧県イ族双語学校のカリキュラムに関する調査、雲南省永寧中学校、浪放小学校、落水小学校、寧浪民族小学校における民族文化の伝承に関する調査、寧浪県プミ族のハンガイ養成校に関する調査、第5回(2018年3月23日-30日): 四川省社会科学院チャン族文化研究者を対象としたインタビュー調査、ハンガイ文化教室の現状に関する調査(雲南省寧浪県プミ族文化保護協会)。

### 4. 研究成果

前述した「三段階教育課程モデル」の実施は、少数民族が「二言語教育」の枠組みに拘束されない、より多様な文化の学校教育への導入に政策的根拠を与えた。西南での調査で、少数民族を取り巻く社会環境が激変する中、少数民族の文化は、もはや保護し伝承しようとする意識のもと、制度化された装置に頼らなければ伝承が困難な実態が明らかになった。ナシ族が民族教育教材として開発した「白沙-私の故郷」、トン族の「歌垣の教室入り」の取り組み、モソ人が開発した「神秘の永寧 モソ人の故郷」などは、その一例である。

実在する民族文化の豊富さに対して、学

校教育とは極めて限定的な時空と言わざるを得ない。このことは、少数民族文化の教育課程化において、文化選択が重要な課題となることを意味する。筆者は西南少数民族地域での事例から、文化選択の要素を以下のように抽出した。

民族的アイデンティティの構築に適した象徴的な文化要素であること

文化伝承の取り組みの背景には、他民族との間に境界を設け、それを維持していこうとする、いわゆる民族的アイデンティティ表象のニーズがある。アイデンティティ表象に用いられる文化とは、自他ともに認める、明確でシンボリックな特性を持つことが求められる。例えば、「音楽の民」を標榜するトン族は、「歌垣」をアイデンティティの構築に最も適した文化として選択し、「歌垣の教室入り」を果たしたのである。

実益をもたらす文化資源として開発が期待されること

古今東西を問わず、メリットを生まない文化は伝承されにくい。選ばれて伝わる文化は、一定のニーズがあり、コストに見合う何らかの実益をもたらすことが期待される。事実、現地の人々は「歌垣」が貴州省の人気のある「エスニック・ツーリズム」の資源として開発され、地元で恩恵をもたらすことを期待している。歌垣は目に見える形で恩恵をもたらすのに対して、トン文は「文字を持つ民族と名乗る時にしか役立たない」から、事実上、学校教育で本腰を入れて扱われることはないのである。

「個」のニーズに配慮したアプローチであること

今日における文化の伝承をめぐる力学には、民族という集団の論理とは必ずしも合致しない「個」の要因が強く働く。用意された文化資源を消費せざるを得なかった社会から、個人が自らのニーズに基づき文化資源を選択して消費する社会へと時代が移

った。トン族の「歌垣の教室入り」のように、子どもを社会的成功へと導く可能性を見出せる文化伝承の試みは、広く保護者の支持を得ることができる。少なくとも「個」（生徒）の社会的成功を妨げないことが求められる。建国後に新たに文字を創出した民族が自らの文字の普及に本格的に取り組まないことの最大の理由は、それが必ずしも「個」の成功を約束するものとみなされないからである。西南でのほとんどの事例は、文化選択の過程において「個」を視野に入れたアプローチを用いることの必要性を示唆する。つまり、民族という「集団」としての文化伝承と「個」としての「社会的成功」という二つの要請の妥協が求められるのである。

少数民族の文化の教育課程化は、それが単に民族文化保存の媒体、または民族文化の伝承手段であるのみならず、民族の文化が取捨選択を通して整理される過程であり、また、新しい内容が加わったり、新しい意味が付与されたりしつつ、より高いレベルへと昇華する文化変容の過程でもある。このプロセスは、地域文化資源の観光化と同様のプロセスと機能を持つものであり、必ずしも非難されるべきものではない。

少数民族文化の教育課程化は、中国の少数民族の教育が新たな段階に入ったことを示す象徴的出来事ではあるが、いずれの事例も従来の仕組みを踏襲し、既成の教育システムに抵触しない範囲内での展開が可能だった点で共通している。しかし、少数民族が自らの言語や信仰などの保護・伝承を求め始めた時、既存の学校教育は種々の構造的不適応を露わにした。つまり、国民国家の枠組みにおける「国民教育」と民族文化の伝承を目指す「民族教育」が学校という空間において両立することを前提に設計された制度は、その実施過程において 55 の民族の言語や信仰の伝承を受け持つこと

の非現実性を露呈したのである。今日、西南少数民族地域において、宗教的職能者の育成校の設置など、自らのニーズに基づいた教育システムの構築を目指した動きがみられる。これらの実践は少数民族の文化伝承が持つ本質的意義の再検討と、それを担うシステムの在り方への根源的な問いを内包したものであり、更に新しい研究テーマに発展する可能性を秘めた動きといえる。今後、文化伝承の実践が教育にシステム変容をもたらす新しい要因となった背景、民族言語の保護と聖職者の養成が文字を持たない小規模民族の文化伝承における位置づけ、少数民族自らの文化伝承装置の構築に向けて制度的モデルの提供可能性の検証等をこれからの課題としたい。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 10 件)

金龍哲. 教育課程化過程における少数民族文化の取捨選択に関する一考察  
トン族の“歌垣の教室入り”を事例に.  
中国四国教育学会. 教育学研究紀要 (CD ROM 版) 2017 ; 63 : pp.378-383. (査読無)

金龍哲. 浅談日本大学目標管理模式与大学功能分化政策 (日本における大学の目標管理と大学の機能分化政策に関する研究). 中日教育研究協会. 中日教育論壇 2017 ; 7 : pp.26-34 (査読有)

金龍哲. 共生社会論の諸相とその系譜  
共生は如何なる論理で語られてきたか. 日本語文化研究 (第五集). 掲載決定済み (査読有)

金龍哲. “知識の制度”としての大学と地域貢献—横須賀市の谷戸における学生シェアハウスと地域支援活動. 大学と地域居住 2016 ; 1 : pp.18—24. (査読無)

金龍哲. 13 歳の成人式—母系社会で大

人になるということ. 育ちから見た大人の発達課題. そだちの科学 2016 ; 26 : pp.74-78. (査読無)

金龍哲. 共に生きることを学ぶ—文化多様性の視点から見た教育の課題. 現代社会の人間形成三恵社, 2016 ; pp.1-16. (査読無)

金龍哲. “文化多様性”という思想—日中における受容と展開. (中朝韓日文化比較研究叢書) 日本語文化研究 2015 ; 4 pp.62-75. (査読有)

金龍哲. 中国における少数民族の無形文化財の伝承と学校教育—トン族の歌垣の教育課程化の試みを中心に. 中国四国教育学会. 教育学研究紀要 (CD ROM 版) 2015 ; 61 : pp.67-72. (査読無)

金龍哲. 中国における少数民族の文化伝承を目指したカリキュラム開発—新しい教育課程モデルとの関係に注目して. 中国四国教育学会. 教育学研究紀要 (CD-ROM 版) 2014 年 ; 60 : pp.386-391. (査読無)

金龍哲. リテラシー概念の受容—新課程標準に見る PISA の影響. 週間教育資料. 2014 ; 2 : pp.22-23. (査読無)

[学会発表](計 16 件)

金龍哲. 食べられた文字と創られた文字—中国貴州省のトン族の事例にみる民族の文字を巡る心性. 日本文化人類学会第 51 回研究大会 (神戸大学 2017 年 5 月 27 日)

金龍哲. 教育の変革と“個の覚醒”  
フィールドでみる民族文化の伝承を巡る力学. 日本比較教育学会第 53 回研究大会ラウンドテーブル 2 (東京大学 2017 年 6 月 23 日)

金龍哲. 中国西南における少数民族の信仰体系と宗教的職能者の現在—モン

人の事例に見る伝統文化伝承のもう一つの課題.日本比較教育学会第 53 回大会(東京大学 2017 年 6 月 24 日)

金龍哲. 日本における共生社会の論理とその系譜 共生社会に向けた教育は如何にして可能か.第五届中日韓朝語言文化比較研究国際シンポジウム(延大日本研究所 2017 年 8 月 19 日)

金龍哲. 学校における宗教的職能者の育成は可能か 浮き彫りにされつつある文化多様性の本質的課題.アジア教育学会第 12 回研究大会(明治大学 2017 年 11 月 4 日)

金龍哲. 教育課程化過程における少数民族文化の取捨選択に関する一考察 トン族の“歌垣の教室入り”を事例に.中国四国教育学会第 69 大会(広島女学院大学 2017 年 11 月 25 - 26 日)

金龍哲. 学校での“方言教育”は可能か-中国における方言の保護と伝承を巡る動向、日本比較教育学会第 52 回大会(大阪大学 2016 年 6 月 26 日)

金龍哲. フィールドから問う文化の取捨選択のメカニズム(基調報告).西南民族文化研究会(昆明 2016 年 8 月 24 日)

金龍哲. 少数民族の新創出文字と学校教育 - 文化伝承のもう一つの課題. アジア教育学会.第 10 回大会(有明教育芸術短期大学 2015 年 10 月 24 日)

金龍哲. 中国における“文化多様性”を巡る語りの諸相 少数民族文化の教育課程化の動向との関係性に注目して.日本比較教育学会第 51 回大会(宇都宮大学 2015 年 6 月 13 日)

金龍哲.少数民族の無形文化財の伝承と学校教育 中国トン族の歌垣の教育課程化の試みを中心に.中国四国教育学会第 67 回大会(岡山大学 2015 年 11 月 14 日)

金龍哲.“文化多様性”という思想 日本と中国における受容と展開(基調報告).第四回中日韓朝言語文化比較研究国際シンポジウム(延辺大学 2015 年 8 月 19 日)

金龍哲.文化多様性の論理と射程 “周辺文化”の教育課程化の動向を中心に(招待講演).日本教育社会学会第 67 回大会(駒澤大学 2015 年 9 月 9 日)

金龍哲.新しい教育課程モデルと民族文化の伝承 学校において民族文化の伝承は如何にして可能か.アジア教育学会第 9 回研究大会(埼玉工業仙大学 2014 年 11 月 1 日)

金龍哲.中国における少数民族の文化伝承を目指したカリキュラム開発の新展開 新しい教育課程モデルとの関係性に注目して.中国四国教育学会第 66 回研究大会(広島大学 2014 年 11 月 16 日)

金龍哲.鎌で剃る“秦の髪型” ピャサ・ミャオ族の成年儀礼.日本文化人類学会第 48 回研究大会(幕張メッセ国際会議場 2014 年 5 月 17 日)

〔図書〕(計 1 件)

金龍哲編、三恵社、現代社会の人間形成. 2016.202

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

金龍哲 (JIN Longzhe)

神奈川県立保健福祉大学・保健福祉学部・教授

研究者番号: 20274029

### (2)研究分担者 なし

### (3)連携研究者 なし